

## 泌尿器科のご案内

泌尿器科診療部長 登丸 行雄



泌尿器科は、尿路（腎臓、尿管、膀胱、尿道）と男性生殖器（せいそう ぜんりつせん 精巣、前立腺など）、そして腎機能障害の治療（透析、各種の緊急血液浄化）を担当しています。外来で行われる治療は、ぼうこうえん じんう えん 膀胱炎や腎盂炎などの細菌感染症、前立腺肥大症や頻尿・尿失禁などの排尿障害疾患、慢性腎不全の保存的治療などがありますが、最も多い病気は泌尿器科関係の癌疾患とその治療です。

泌尿器科が扱う癌は、25年前と比べ、前立腺癌は3倍に、ぼうこうがん じんうようかんがん じんさいぼうがん 膀胱癌・腎盂尿管癌・腎細胞癌は約2倍に患者数が急増しています。この原因として、高齢化、食生活の欧米化、環境汚染物質の増加などが上げられていますが、はっきりしていません。環境汚染物質に影響を受けやすいと考えられる精巣癌は現在のところ目立った増加傾向はありません。癌が増加している原因がはっきりしていないため、的確な予防法は残念ながらありません。また、残念なことに進行してしまった状態で病院を受診される方が桐生地域では大勢いらっしゃいます。

では、根治治療が可能な早期の癌を発見するにはどうしたらよいでしょうか？病気別にお話したいと思います。

**前立腺癌：**50歳を過ぎた男性に、前立腺肥大症とともに最近著しくこの病気になられる方が増加しており、当院でも年間60人前後の方が、新たに前立腺癌と診断されています。「尿の出が悪くないから前立腺の病気の心配はないだろう」と思われるのは間違いで、前立腺肥大症と違い、早期には排尿障害の症状がありません。手軽に採血検査でP S A（前立腺特異抗原）を測定することで、癌になっている確率がどのくらいかが判かります。50歳を過ぎたら1年に1回、P S Aの検査をかかりつけの先生に測定してもらおうようにしましょう。

**膀胱癌、尿管・腎盂癌：**まとめて尿路上皮癌と呼ばれ、40歳以上の男女に発生します。進行すると排尿時痛や血尿などが伴いますが、早期ではそのような症状はほとんど出ません。健康診断で尿潜血反応が（1+）以上の場合、念のため泌尿器科の受診をお勧めします。特に、排尿痛などの症状が伴わない肉眼的血尿（目で見て赤い）があったときは、「1・2回排尿したら消えてしまったので大丈夫」と思わないで、なるべく早く泌尿器科の受診をお勧めします。

**腎細胞癌：**早期にはまったく自覚症状がありません。しかも根本治療できるのは早期発見・早期手術が可能なおきだけです。進行すると分子標的薬などで治療しますが、副作用が多く楽な治療ではありません。根治治療が出来た方の多くは、人間ドックでのエコー検査や、他の病気の検査で行ったC Tで発見されています。1年に1回、人間ドックを受けられることをお勧めします。

**精巣癌：**10代後半から30歳代の男性に見られる非セミノーマ癌と、40歳代以上に多くみられるセミノーマ癌があります。特に非セミノーマ癌は病気の進行が早く、短期間に進行してしまいます。精巣にしこりを触れたり違和感をもったら、1日でも早く泌尿器科の受診をお勧めします。

受診される時、今までの健康診断の検査結果や、内服されている薬の説明書などをお持ちの方は、ぜひご持参ください。診断や治療に有意義な手がかりとなることがあります。